

## 故大串肇牧師記念礼拝

「種を蒔き続けよ」

コヘレト 11 : 1 - 8 / ヨハネ 12:24

2024. 2. 4

仙川教会代務者 大串眞

最初に大串肇牧師の説教の音声録音されたCDを流します。

—CD音声—

信仰とは、忍耐しつつも前に向いて歩み続けること。その日の説教の結びではありますが、それは、大串肇牧師がみなさんに受け継いでほしい、思いの要約でありましょう。

私も、これと似た印象を大串肇牧師から受け継いだように思います。兄の場合は歩み続けるというよりは、駆け抜けた生涯であったなあという印象でしたが。

昨年の2023年1月8日に65歳の地上の生涯を閉じました。仙川教会の主任担任教師大串肇牧師。わたしにとっては兄ですが、その数日前の電話で苦しそうな声である依頼を受けました。それは仙川教会の代務者になってほしいという依頼でした。それはまだ、これからさらに本格的な闘病生活があるから、それに専念するために代務者になってほしい、そういう依頼でした。しかし、それは、数日のうちに内容が変わりました。肇牧師の死を受けての代務者であることが数日のうちにわかりました。突然のことでしたが私も、本務教会であるユウカリが丘教会としても緊急事態として精一杯応えるという形で御引き受けしました。第一主日は千葉本町教会の森下滋牧師、静香牧師が交代できてくださいました。仙川教会は、西東京関係、吉祥寺教会関係、出身教職その他の先生方が遣わされて説教をしてくださり、礼拝が守られました。それから一年が経ったわけです。実際に代務を引き受けてみますと、仙川教会が負った傷の深さが分かってきました。30年間牧会してきた主任担任教師をこのような形で天に送るということは、相当な痛手でありましたし、なかなか気持ちを切り替えて前向きになれない。そういう方々も多かったのではないのでしょうか。それなりの時間も必要だったということでしょう。そして、聖霊の導きでありましょう。次第に新しい歩みに向けての期待感が出てきたように思います。それは、たくさんの説教者がそれぞれの教会や教育の現場から派遣されて、充実して礼拝を持つことがゆるされたことにあったように思います。協力してくださった先生方から、仙川教会の礼拝に参加した時のご感想を伺いました。それは礼拝に対する期待というのでしょうか。み言葉に対する期待というのでしょうか。仙川教会が生き生きと息を吹き返して、新しい出発が導かれつつあるという手ごたえが代務者のところまで伝わって参りました。それならばと、この年度の途中で、大串肇牧師の記念会を教会として行い、それを機会にいいよ悲しみを乗り越えて、新しい出発をさせていただこうと願ったことでした。

そして、さらに、次期教師の招聘が進むに連れて明らかになったことは、2代続いた、大串の名前のついた主任担任教師ではなくて、新しいお名前の教師となっていくということです。それは60周年を迎える仙川教会にとっても、大きな転換期を迎えているということでありましょう。そこで、本日は、大串肇牧師から遡って、大串元亮牧師、そして、この教会の創立に関わった歴史ということにも触れて、そういう流れの中で、新しい仙川教会の時代を迎えるとはどういうことかということにも触れてみたいと思います。まあ、このことをわたしは語ることのできる立場にいる最後のものかなと思います。

さて、まず、本日読みました聖書の箇所についてですが、私は、大串肇牧師が駆け抜けるようにして天に召されていったことに触れた際に、ヨハネ 12:24 が与えられました。

12:24 はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

駆け抜けるようにして天に召されて行った、大串肇牧師の死は、いったいどんな意味があるのだろうか。きっとこの死には、意味があるだろう。それは、この死で終わりになるというのではなく、この死から始まる。この死からさらに豊かに広がっていく展開が待っているだろう。

それは、今日の説教題にしました。「種を蒔き続ける」という意味であろうと示されたのです。コヘレトの言葉 11章6節にこういう言葉があります。

「朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。

実を結ぶのはあれかこれか、それとも両方なのか。わからないのだから。」

大串肇牧師の葬儀の司式をしてくださった小友聡先生が、2024年最新の『婦人の友』誌に書かれたものを読みました。小友先生は、NHKのEテレでも若松英輔氏と「コヘレトの言葉」を講義された放送が好評を博したのでしたね。小友先生は、「種を蒔き続けよ」と題して書かれていました。これは今日的なメッセージだといえます。コヘレトは、空の空、なんという虚しさという言葉から始まるのが有名です。ある意味虚無的な現実を見ているのです。不安とあきらめの世界に覆われている中で何をやっても空回りすることも冷静に見つめています。しかし、そこで、絶望してしまう。何もかもいやになって投げ出してしまわずに、踏みとどまって希望をもって種を蒔き続けるべきだと語るのです。悲観的そうでも、希望がある。現実的でありながらも、理想や夢を捨てていないのです。それはやはり根本のところに信仰があるからですね。だから確かに一見、種を蒔き続けるのは、先行き不透明で、徒勞で終わってしまいそうなリスクもあるのに、無駄のように思えるかもしれないのに、そういう中で手を休めるのではなく、種を蒔き続けるべきだといふのです。11:1に「パンを投げよ」とあります。これも、同じ視点に立って語られているメッセージです。川にパンを投げるのも、朝に晩に種を蒔き続けるのも、昔から、教育的な働きと解釈されていました。そして、子どもの教会や幼児教育に携わる教師たちや親たちを励ましてきました。

そして、このことは、仙川教会の歴史とも関係があります。またある家族の証し、ファミリーストーリーでもあります。

事の起こりは、森永製菓を創設した森永太郎氏から話が始まります。森永氏は、九州の有田の出身です。単身アメリカにわたって西洋菓子の職人となります。しかし、それに先だってアメリカのキリスト教に触れ、教会の人々に触れて洗礼を受けクリスチャンになるのです。日本に帰国する際に、森永氏は、純粋に福音を宣教し、教会を建てたいという志を一番に持っていたそうです。しかし教会を建てるためには、まずその資金をためる必要がある。そこで森永製菓を立ち上げるのです。同じ郷里出身の大串松次が、森永太郎氏を創業時から助けることとなります。それから森永製菓の歴史が始まるのですが、大串松次は、大八車を森永氏と一緒に押し、また引いて西洋菓子売り歩くことから森永の歴史ははじまりました。その頃はまだ西洋の菓子は日本人には浸透していない時代だったのでなかなか最初は売れなかったそうです。森永ミルクキャラメルもそれまでは量り売りや、大きな缶入りの販売でしたが、大串松次が紙サックで販売することを考案しました。その箱に書かれた字は大串松次が書いたものが今でも使われています。キャラメルは売れに売れ、森永の会社は発展していきます。西洋菓子が日本に定着する基礎を築いたと言われています。晩年になり、森永太郎氏は、一線から離れ各地で伝道して歩いたそうです。大串松次も一線から離れたそうですが、今まで企業のために尽くしてきた中で考えていたことがありました。自分の息子である元亮がクリスチャンとなり、牧師となる中で、松次自身、80代になって信仰に導かれます。妻貞子と、息子の元亮が副牧師であった信濃町教会に通い続け、洗礼を受けることとなります。その際のエピソードとして、元亮の妻、つまり、私の母にこう漏らしたという。「これからは教育と宗教だ」

これは企業人として多くの困難の中を歩んできた中で、松次のたどりついた結論であり、ある意味行き詰まりであり、またある意味後の世代に遺した希望の言葉でありました。そして、この「教育と宗教」のために、今までの企業で稼いできた財産を献金としてささげたいと申し出たのです。それは、信濃町教会への献金としてささげられました。当時の2千万円はなかなかのものです。この辺りのことが、キリスト新聞の記事として残っています。お読みください。結果として、信濃町教会の開拓伝道地として、東京都調布市仙川が選ばれ、仙川教会開拓伝道が始まることとなります。その当時仙川は今のような住宅地ではなく、麦畑と原っぱが一面に広がるのどかな地でした。しかし、展望の拓ける地だったようです。そこで「地の果てまで福音を」(使徒1:8)をモットーにして、仙川伝道所が開設されました。最初の主任担任教師が、大串元亮です。近隣に住む信濃町教会員が株分けされて最初の教会員となりました。すぐに会堂が建ち、第2種教会を飛び級していきなり第一教会となりました。開設の2年後に、子どもの家も始まっています。これはかなり恵まれたスタートとなりました。しかし、牧会して30年の頃、今からも30年前になりますが、元亮は心臓病で倒れ、バイパス手術をして主任担任教師を辞することになります。大串肇が、すぐに仙川教会の2代目牧師として就任する。それから30年が経つのです。私は、1年間仙川教会の代務者として務める中で、森永氏から始まって、祖父から父、父から兄に継承されてきた一つのラインの中にあっただという感想を持ちました。それは、「教育と宗教」です。ひっくり返すと「宗教と教育」です。父も兄も仙川教会の主任担任教師をしながら神学大学で教鞭をとってきました。その関係者も多く仙川教会と関わりました。まさに「宗教と教育」だったのです。「種を蒔き続ける」ことが大切にされてきました。

今後は、大串の名前の牧師ではなくなるのです。その名は忘れていって良いのです。しかし、種は蒔かれ続けるのです。これからは仙川教会のストーリーとしてさらに広がっていくことに意味があります。

大串肇牧師が、会堂建築をし、さらに、パイプオルガンの導入をした際に、思いを綴った文書を最近読みました。宗教改革の伝統の中で、ルターによって大切にされ、またバッハなどによって受け継がれたもの。それは御言葉の説教が中心にありました。コーラルつまり讃美歌を作り、パイプオルガンが礼拝に用いられていきました。それは、決して会堂や音楽が主になることではありません。むしろ、会堂や音楽は奉仕に徹することで、中心には御言葉が豊かに語られることがありました。宣教としての説教が中心にありました。それが伝道になる。仙川教会の会堂とパイプオルガンはこの宣教に奉仕する器として大いに用いられる。御言葉がより豊かに力強く語られていくために、地の果てまで御言葉が届くために。これが兄、大串肇牧師が描いていたビジョンです。残念ながらコロナ禍がありました。また、主任担任教師が病に倒れるということもあり、会堂とパイプオルガンが用いられて地の果てまで伝道が前進する働きは一旦ブレーキがかかったと言えましょう。しかし、これで終わったわけではありません。後任として招聘が決定した高橋圭子先生もこのことを大切にしていきたいと仰っておられます。しかしまた新たなビジョンも描かれることでありましょう。大切なことは、仙川教会に引き継がれてきた宗教と教育を通し、種を蒔き続けること、地の果てに向かってさらに前進して行くということです。

最後に、ミレーの「種まく人」という絵がありますが、あの絵は大変力強く、種を蒔く姿が描かれていて、私は好きです。喜びと確信を持って種を蒔くのです。どうか皆さんが、この時代の中で、こんな時代だからこそ、夢を持って、ビジョンを持って、たくましく、理想を高く掲げて、種を蒔き続けていっていただきたい。共に蒔き続けましょう。お祈りいたします。